

地球的視野に立って行動し、 変化の時代を生きる資質を

田仲可昌
生物科学系教授

はじめに

大学院教育は、「分野による教育方針の違い」を大前提にして考える必要があることをまず強調したいと思います。現在は多様な形態の大学院が存在し、その中の各組織が社会からの多様な要求にそれぞれ応えながら、一方では組織自身が自立的に設計した、未来社会で活躍する人材育成を行っています。それぞれの大学院・研究科が多様な目的を持つことを考えれば、大学院教育の様態も組織・研究科ごとに多様にならざるを得ませんし、むしろ多様であることが基本であると考えます。もちろん、より大きな視点から考えたり、共通の問題点を考えて議論することは可能ですが、それでも、基本としては「分野による教育方針の違い」を考えて議論することが大前提になると思われます。このことを前提にして、私が関係している生物科学分野を中心に、大学院教育について考えて見た

と思います。

1. 国際化に対応できる院生の育成

世界はますます「グローバル化」、「国際化」の時代になり、このような時代に対応できる人材の育成の必要性が各方面で言われています。大学院の入学式や修了式で、この言葉が含まれていない祝辞は、おそらく皆無と見てよいのではないのでしょうか。また、多くの大学人もこのことに異論はないと思います。では実際、これを達成するために具体的な方策を実施しているのでしょうか。私は「否」と考えます。わが国の学問・研究は、ここ3年間の日本人のノーベル賞受賞が示すように、さらには、生命科学の分野でのゲノム研究に見られるように、国際的に十分に健闘しています。しかし、「教育」はこれから10年、20年後のことを先取りしながら推し進めることが必要であろうと思われます。

そこで私は、少なくとも実験科学の分野の大学院生には、もっと「英語コミュニケーション力」を付けさせる重要性を指摘したいと思います。具体的には、

1) 新研究科に1名の英語の外国人教師を雇用して、英語によるセミナー、英語論文の書き方に関する授業科目を開設し、原則必修にすることと、2) 院生にToeflやToEICなどの英語の統一試験を受けさせて研鑽させることを提案します。

実のところ、構造生物学専攻と情報生物学専攻（以下、両専攻）では、生物学類担当の外国人教師をお願いして、平成15年度から、Writing Research Reports Lecture（学術論文の書き方：概論）2単位：原則必修、Writing Research Reports Laboratory（学術論文の書き方：演習）1単位、Biology Seminar in English I～III（生物学セミナーI～III）各1単位を開講することにしました。生物学研究科ではすでに、専門語学特講、専門語学セミナーA、B各3単位を開講しています。しかし、必修ではないために受講生の数は少ないのが実情です。平成13年度に、「教員—院生連絡会」の活動の一環として、生物学研究科と両専攻の院生に大規模なアンケート調査を行いました。その中の英語教育に関する質問に対して、回答者（回収率50%）の10%し

か受講していないことがわかり、英語によるコミュニケーション力の重要性を院生が理解していないことをうかがわせました。

しかし私は、真の「国際化」を標榜するのならこれでも不十分であると考えます。開学当初から国際一級の大学を志向することを明言してきた筑波大学であるならば、10年後ぐらいには大学院の授業はすべて英語で行うことを目標にして、それを筑波大学の特徴にするのが良いと私は考えています。ただ、問題点は2つあります。ひとつは、筑波フォーラム61「特集 日本語力を考える：筑波大生の「国語力」の問題点について」で、文芸・言語学系の石塚修先生が大学生全般に「国語力」が低下していることを指摘されている点です。日本語での表現力が低下している状況で、英語の授業が成立するのかどうかは専門家の意見を伺う必要があるかもしれません。二つ目は、教員採用の時に「英語で授業が出来る」ことを配慮することが良いのかもしれません。

2. 大学院の入試方法を変えれば、大学教育が変わる。

よく、「大学入試の方法を変えれば高校教育が変わる」と言われます。昨今の

大学生の学力の低下は、大学の入試科目数の減少に大いに関係があると言われていいます。同じように、大学院の入試方法を変えれば大学教育が変わるのではないのでしょうか。私が1つ提案したいのは、外国語（最近はほとんどが英語です）の試験は、ToeflやToEIC等をもって替えさせるといことです。これに関しては、文部科学省の「英語教育改革に関する懇談会」（http://www.mext.go.jp/b_menu/soshiki/dajin/f020714.htm）での役に立つ英語の重要性の議論や、文部科学大臣発言～『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想（http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/f020201.htm）～があります。答申として世に出て、さらに実際に実行されるまでには10年や20年かかるのかもしれませんが、ただ、最近は変化が急な時代でもあるので、思ったよりも早く予算的な面も含めて実行可能になる日が近いことも考えられます。真の国際化は、授業や実験室での会話が英語になった時、欧米やアジア等からの出身の教員や院生が20%程度は占めるようになった時ではないのでしょうか。

3. 大学院前期課程進学者の増加と院生 気質の変化

1965年ごろから、大学院への進学者が

増加しはじめるのですが、多くは修士課程を修了し社会へ出て行きました。人数の規模としては、現在の博士課程修了者の数と対応するのではないのでしょうか。最近、前期課程への進学者の数がさらに大きく増加していて、院生の気質も大きく変化していると感じます。研究者にとっては必須の資質である「幅広い視野」を身につけようとする院生が少なくなったような気がします。これに関した生物科学研究科での典型的な例は、非常勤講師による集中講義の単位を1単位も取らずに修士学位を取得して退学した院生がいたことです。関連して、集中講義への出席率が低いことも驚きです。これに関しても両専攻では、平成14年度から集中講義等で6単位を履修することを院生に義務付けることにしました。すなわち、最近の院生の多くは、規則で縛って履修を強制しなければならない状況にきていることです。もちろん、何事にも積極的でやる気のある院生もいますが、全体としてみると、ここ数年でその人数が減少していると感じます。結論を言えば、院生の自主性に期待する時代は去っているので、カリキュラムをしっかりと組んで、適宜必修科目も組み込んで対応しなければならない時代になっていることです。関連して、筑波大学の特色

である「五年一貫性」の制度は、このような院生の気質の変化を考えると時代にそぐわなくなっていると言わざるを得ません。

4. 大学院でも授業評価を

現在、多くの組織が「評価」の波にさらされています。大学院の教育組織でも可能な限り学生の評価を取り入れる方向に進む必要があると思います。「可能な限り」と言ったのは、授業科目によっては、受講者の数が少なかったり授業形態が講義方式でなかったりして、いわゆる「評価」を行うのが適切でない場合もあると考えるからです。このような場合はむしろ、「評価」というよりは、両者の話し合い・相互討論を通して、より良い形に持っていくのが良いのではないのでしょうか。また、評価は、より良い授業形態への改善を志向することを前提にして、評価をプラスに受け止める状況をつくる必要があると思います。

5. 私が育てたい大学院生

私が育てたい院生は、一言で言えば、「幅広い視野を身につけることによって自分の夢を見つけ、「やる気」をだしてそれを大切に育てていける院生」です。この幅広い視野を身につけるには、好奇

心と向上心によって動機付けされた努力が必要であると思われます。すなわち「やる気」です。「やる気」はなにも大学院での研究・教育だけに限らず、すべての組織で求められる資質能力です。また、幅広い視野を身につけることによって、異分野へ果敢に飛び込み新しい分野を開拓することが出来ると思われま

す。さて、平成9年7月に答申された教育職員養成審議会の「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」(第1次答申)の中で、具体的な改善方策として「教職に関する科目」の中に新たに「総合演習」を設けことを提言しています。この中で、教育職員の志望者は私のタイトルに示すような資質能力を主体的な体験を通して育てる必要があると言っています。大学生であろうが大学院生であろうが基本的な教育方針は同じであると思われ、キーワードは「地球的視野」と「変化の時代」です。

(たなかよしまさ 遺伝情報学)